

なにもしないをするとき

写真学科
カワノミオ

time to do nothing

Department of Photography
KAWANO Mio

本作はシンプルな構造のピンホールカメラを用いることから始めた。

私は写真制作における“レタッチ”という役割を生業としている。ただただひたすら、デジタル化されたデータと向き合い、画像と画像を掛け合わせたり、ピント・質感・色味等を、上げたいベストな状態に持っていく。その様な自分が、アナログからのアプローチで写真制作を行うとどうなるのか、また、今現在の自分がどれだけデジタルデータと遊べるのか、模索してみることにした。

使用するピンホールカメラは、焦点距離90ミリで、光を通す穴が約0.3ミリととても小さいため、絞りは約F300となる。F300で得られる画像は、ピントが全体にきているのだが、全体的にぼやぼやとしていて、合っていないように見える。露光時間も長時間となるため、固定していてもカメラが被写体がわずかにブレしてしまうのも、ぼやぼやの要因のひとつである。

普段自分が扱うデジタルデータは、ピントが見せたい箇所においてあり、シャープネスは高め、被写体の質感がしっかりでている画像がほとんどである。ピンホール写真で得られる画像は普段の画像とは真逆のスタンスである。

私は“何もしない、空白の時間”をととても大切にしている。呼吸を整え、目の前にある世界を見渡す。その時間は、全体的にピントは合っていて、全体的にすこしぼんやりしている。









